

多和田葉子の描く言葉の射程

——「献灯使」を中心に

來村尚紀

第一章 多和田葉子と「献灯使」について

多和田葉子『献灯使』（講談社、二〇一四年）は、表題作でもある「献灯使」（『群像』二〇一四年八月）のほかに、「韋駄天どこまでも」（『群像』二〇一四年二月）、「不死の鳥」（『それでも三月は、また』講談社、二〇一二年）、「彼岸」（『早稲田文学』二〇一四年秋）、「動物たちのバベル」（『すばる』二〇一三年八月）という五作品が収録された作品集である（なお、本論では、作品集を『献灯使』、短編一作を「献灯使」と表記し、主に「献灯使」について分析と考察をおこなっていく）。

『献灯使』は、原子力発電所の事故や、大災害、大洪水などの事故により崩壊した世界を舞台にした物語が収録されているディストピア文学作品集である。また、本作品集は、放射能災害、震災などが物語要素に含まれていることや、本作品集に収録されている「不死の鳥」が東日本大震災をテーマに描かれて

いることから震災文学としても高く評価されている。

そして、表題作でもある「献灯使」の世界は、未曾有の大災害の影響で、東京二十三区は危険地域となり、ほとんど人が住んでいない状態である。また、日本政府は鎖国政策をとり、外来語が禁止され、自動車もインターネットもなくなり、国内での移動でさえ制限がされている状況である。この物語は、そのような世界で暮らす老人の義郎と義郎の曾孫である無名の送る日常の暮らしと、少年へと成長した無名を鎖国の法を犯して、「献灯使」として海外へと密航させることを描いたものである。

つまり、この物語は、未曾有の大災害を経た近未来の日本が舞台となっている「限りなく現実に近いディストピア」小説である。しかし、それだけではない。本作品には、著者である多和田葉子自身が、「献灯使」という小説には日本語でしか出来ない言葉遊びがとて多い¹⁾とコメントしているように、物語内に「言葉遊び」が、いくつも織り交ぜられている。

ここで、研究動向を確認しておけば、『献灯使』は、他の多和田葉子作品に比べると、論及が多い作品である。しかし、十分に研究されているかといえば、論点が類似しているものがほとんどで、その多様性が求められている状況である。ここでは、論点ごとに各研究を整理し、研究の現在地を確かめておきたい。

先行研究としては、范淑文「作家に語られた震災——多和田葉子を中心に——」^②のほか、増本浩子「希望に満ちたディストピア——多和田葉子の震災文学」^③、木村朗子「放射能災害の想像力——多和田葉子「献灯使」のかたること」^④など、『献灯使』を震災文学として読解したものが多く存在する。

しかし、表題作である「献灯使」が、日本で二〇一一年三月一日に発生した東日本大震災をテーマに描かれたものかという点、必ずしも、そうではない。これについて、安西晋二が、『震災や原発事故（放射能汚染）を直接的に示す言葉が周到に避けられている』と述べているように、「献灯使」に描かれた「大災害」は、東日本大震災に限定されるものでなく、あくまでも「大災害」として描かれているといえる。

これらのことから、『献灯使』は、ディストピア文学と震災文学、どちらの側面も持った作品集といえるだろう。

そして、本稿で取り上げる作品である「献灯使」に関する研究は、安西晋二「多和田葉子「献灯使」に描かれた〈老い〉——身体と認識との差異」のほか、岩川ありさ「変わり身せよ、無名のもの——多和田葉子「献灯使」論」^⑤や市原礼子「多和田葉

子ディストピア小説——『献灯使』」などがあるが、どれも、未曾有の大災害を経た近未来の日本を舞台に展開される物語自体や物語の設定に注目して読解、考察を試みたものである。

裏返すと、これまでの研究において、作中に描かれた多和田葉子の独特な言語感覚が垣間見える「言葉遊び」や政治的なアイロニーなど多和田特有の表現を中心に据えて論じたものではなく、「献灯使」における「言葉遊び」の読解に関しては、未開拓の状態である。

次に、多和田葉子に関する研究だが、こちらも、多和田がどのような作家であるかを、多和田の作品群や、多和田自身がエッセイなどで語った言葉から読解、分析し、「越境作家」や「エクソフォニー」などの利便性の高い概念やカテゴリーに当てはめたものが大半を占めている状態である。また、多和田が、国や言語を「越境」する作家であることが注目されてきた一方で、多和田の言語感覚や多和田の描く言葉が文学界に及ぼす影響を、作品から読み解くというアプローチはまだなされていない。つまり、『献灯使』と多和田葉子、どちらの研究にしても、主題や論点が類似的かつ限定的で、研究が進んでいないのが現状である。

そこで、本論では、「献灯使」に描かれた「言葉遊び」を拾い上げることで、多和田葉子の言語感覚を読み解き、多和田の描く特徴的な言葉が文学界に及ぼす影響とは一体どのようなものなのか、更には、多和田作品の文学的意義とは何であるかにつ

いて、多和田自身が語った言葉と「献灯使」本文の分析から考察していくこととする。また、本論では、「言葉遊び」の読解のための足掛かりとして「献灯使」に描かれた「越境」要素の分析もおこなう。

第二章「献灯使」における「越境」

ではまず、「献灯使」に描かれた「越境」と、本作品の世界観を確認していききたい。本章では、鎖国状態の日本という「献灯使」の特殊な世界観を分かりやすく読解するために、我々が暮らす「現実」世界の日本と、「献灯使」世界の日本との対比を用いて説明をおこなう。

本作品の舞台が、鎖国状態の日本であることは、第一章で述べたとおりであるが、本作品内での鎖国政策は厳しく、ただ国外への密航を禁じているだけではない。外国の地名など外来語に対しても厳しく取り締まられている。これについては、無名の曾祖父である義郎が、包丁造りの名人と会話する場面の中で、「ニューヨーク」というところだけ声が低くなって、かすれた。外国の都市の名前を口にしてはいけないという奇妙な法律を破って罰せられたという話はまだ聞いたことはないが、それでも外国の地名を口にする時は誰もが警戒するようになっていた（三九頁）、パン屋と会話する場面の中で、「このパンも実は、昔はジャーマンブレッドと呼ばれていました。今の正式名は讃

岐パンです。パンも外来語なんですけどね」（二〇頁）と描かれているように、「献灯使」の世界には、外国の都市の名前を口にしてはいけないという法律があり、その法律が、広く国民に浸透していることが分かる。また、外国の地名がついたモノの名前も規制の対象であり、ジャーマンブレッドなどの既存の商品名も、讃岐パンのように、新しい名前がつけられている。これらのことから、外国や外国のモノに対しての規制が厳しいことが分かる。

では、我々が暮らす「現実」世界の日本と「献灯使」世界の日本では、他になにが異なっているのだろうか。ここで、「献灯使」世界における価値観を確認しておきたい。「献灯使」世界においては、「二等地も含めて東京二十三区全体が、「長く住んでいると複合的な危険にさらされる地区」に指定され、土地も家もお金に換算できるような種類の価値を失った」（五〇頁）とあるように、日本の首都であるにもかかわらず、東京二十三区全体の地価が非常に下落している。また、「献灯使」世界では、土地や家などだけでなく、現金や金融商品の価値も失われている。

高価な果物はほとんど東北、北海道に流れてしまい、東京にまわってくるのはごく一部だった。北部からは見返りとして米と鮭が大量に沖縄に送られてくる。札幌も株も金利も輝きを失った時代、物々交換のできる相手が優先される。

このように、東京の土地や家の価値が下落していることや、物々交換が主流になり、お金や金融商品の価値が失われていることから、「献灯使」に描かれている時代では、我々の世界で「絶対的」と信じられているような価値観がごとごとく変化していることが分かる。こうした価値の変化については、言語も同様である。我々が暮らす「現実」世界の日本では、世界共通語ともいわれる英語は、とても重要視されている言語である。しかし、鎖国政策を取っている「献灯使」世界の日本では、以下のように、英語の学習が禁止されている。

英語を学習することは禁止されている。(中略)公の場で外国語の歌を四十秒以上歌うことは禁止されていた。また、翻訳小説は出版できない。(五八頁)

また、行政についても、同様の価値観の変化が見られる。「現実」世界で、警察の仕事といえは、法律違反を取り締まるのが主な業務であるが、「献灯使」世界の警察は以下のとおりである。

民営化された警察の主な活動は吹奏楽の演奏で、制服を着てお尻をふって歩きながらちんどん屋さんとサーカスの名曲を演奏して町を練り歩く。「中略」交番は廃止された。

かつての交番は「未知案内」と名前を変えて警察署から独立し、道を教えるだけでなく観光案内も兼ねた有料サービス機関になった。(九二、九三頁)

この場面から分かるように、「現実」世界では、警察が主な業務の傍らに取り組んでいる演奏活動が、「献灯使」世界では、警察の主な業務となっている。また、交番は廃止され、かつて交番が担っていた役割は、有料の観光案内所が代わりに担っている。これは、犯罪行為が激減し、それと同時に、法執行という仕事の必要性が減少していった結果であろう。仮にも、我々が暮らす「現実」世界で、万が一にも、警察の民営化は起きえたととしても、犯罪行為が無くなることなど、考えられるだろうか。「殺人」が無くなることはあっても、犯罪行為が完全に無くなることは、現実的に考えにくい。しかし、「献灯使」の世界では、そんなことすら当たり前に起きているのだ。

以上のように、「献灯使」の世界では、都心の土地や家、金銭、英語学習、行政機関などの、我々が暮らす「現実」世界では「絶対的」となりつつある価値観の多くが、ひっくり返っている。このことから、物語の舞台は、日本であり、一定のリアリテイがあるが、世界観としては、フィクションに寄っていることが分かる。また、世界観や価値観が、綺麗に反転されていることで、英語や都心の土地、現金などの価値が、我々の暮らす「現実」世界では、いかに「絶対的」であるか、そして、いかに簡

単に崩れやすいかということも分かる。つまり、「献灯使」世界の日本を通して、「現実」世界の日本を見ることで、我々が暮らす「現実」世界に潜む、固定化した観念が浮かび上がってくるのである。

さらに、「献灯使」世界で変化しているのは、価値観だけではなく。人体も変化している。この世界では、老人ほど身体が剛健である一方で、若者は虚弱で衰弱している。十五歳の無名の健康状態は、「小学校の頃は少しなら自分の脚で歩くこともできたが、成長するにつれて脚を動かすのが難しくなり、長く立っていることさえできなくなってしまった」（一四九頁）とあるように、まだ十五歳であるにも関わらず、歩行すら困難なほどに脚が衰弱していることが分かる。しかし、その一方で、百十五歳の義郎の健康状態はというと、「まだまだ丈夫で、朝は犬を借りて駆け落ちし、〔中略〕リュックサックを背負って直売市場をまわり歩き、〔中略〕下着は盥に漬けておいて両手でもみ洗いし、夜は裁縫箱を出して曾孫のお洒落服を縫う」（一五〇頁）というように、足腰は丈夫で、その後も、掃除、洗濯、裁縫と活動的に生活をしている。我々が生活する「現実」世界の日本では、若い世代が高齢者の面倒を見ることが多く、ヤングケアラー（家族や親族の介護のために、満足に教育が受けられなかったり、同世代との人間関係を上手く構築できなかったりすること）として問題となることもある。

しかし、「献灯使」世界の日本では、身体が丈夫な高齢者が、

身体が虚弱で、歳を重ねるごとに衰弱していく若者の世話をしている。つまり、「献灯使」世界の日本では、我々が思っている若者と老人に対するイメージが逆転している。身体の変化と同時に、価値観も転覆しているのである。

以上の場面から分かるように、「献灯使」には、国境を越える描写以外にも、我々の持っている、「絶対的」といえるような価値観を転覆させる設定や描写が数多く物語内に組み込まれている。つまり、「献灯使」は、国境を越える物語であると同時に、我々の物事に対する認識を、常識から常識の範囲外へと境界線を越えさせるような役割も担った物語なのだ。

そして、登場人物の無名だけでなく、読者である我々にも、「絶対的」な認識という境界を越えさせるには、読者の共通認識である言語が非常に重要である。特に、外来語が禁止されている「献灯使」の世界では、読者である我々が、普段から慣れ親しんでいる日本語表現が重要になってくる。

そこで、次に、「献灯使」において、特徴的な日本語表現が果たす役割を、日本語独自の表現が際立っている場面を分析することで明らかにし、次章でおこなう「言葉遊び」の分析に繋げていく。

本作品の舞台である、外来語が禁止されている鎖国状態の日本において、唯一使用できる言語でもある日本語が重要であるということは、先に述べたとおりである。だが、「献灯使」世界での日本語と我々の世界での日本語では、言葉の意味や使わ

れ方が、少し異なっている。

例えば、無名の担任である夜那谷は、子供たちに対し、「すみません」と「ありがとう」という言葉の意味について、以下のように説明している。

「すみません、は謝る時に使う言葉だ。昔は感謝の気持ちであらわすのにこの言葉を使うことも多かったが、君たちは、悪いことをしていないのに謝ってはいけないよ」〔中略〕「アリガトウって言葉なかつた?」「なんかちよつと甘そうで、かりかりしていいね、アリガトウって。」「その言葉も、もう死んでる。」(一三八頁)

この場面で説明されているように、我々の世界では、「すみません」は、「謝る時」以外にも「感謝の気持ちをあらわす」時に使用する。また、例えば、自分が通りたい場所を塞いでいる人に少し端に避けてもらおう時など、「自分が悪いことをしていない」のに使用したりもする。

そして、無名のクラスメイト達は、「アリガトウ」という言葉について、「甘そうでかりかりしている」とまるで角砂糖のことを表しているかのような印象を持っており、意味については知らない素振りを見せている。これについて、夜那谷は、「アリガトウ」が死語であることを伝えたのち、「アリガトウ」について、以下のように考える。

「ありがとうっていうのは、ちよつといい言葉かもしれない。当たり前になっちゃったことを、有り難いこと、つまり減多にないこととして、感謝と驚きをもって味わう。

ありがとう」(一四〇頁)

この場面では、無名のクラスメイト達が「アリガトウ」と言ったのに対し、夜那谷は「ありがとう」と言っている。つまり、夜那谷と無名のクラスメイト達では、片仮名と平仮名で表記が揺れているのだ。したがって、ここから、夜那谷は、「ありがとう」の言葉の意味を知っていて、発音もできる一方で、無名のクラスメイト達は、「アリガトウ」の意味も知らなければ、発音も正しく出来ていない。また、ここでは、「すみません」は、意味を知らない無名らに、あえて誤用させ、担任の夜那谷が、正しい意味や使い方を解説する。「ありがとう」は、同じく意味を知らない無名らに、言葉を物質化したかのような感想のみを語らせ、「ありがとう」を使っていた時代を経験している夜那谷が、その意味を考える。そして、この一連の文章を読むことで、我々は、改めて、「ありがとう」と「すみません」について考えさせられる。つまり、この文章は、我々の世界と「献灯使」世界での日本語の違いを説明すると同時に、我々にとっては当たり前の言葉の意味や使い方について、もう一度考えさせるための仕組みになっているのだ。

以上のように、「献灯使」世界での日本では、我々が普段から、何気なく使用している単語の用途が限定されていたり、あるいは、単語自体が死語となり、使われなくなっていたりしているのである。また、「献灯使」世界での特徴的な日本語表現は、我々が普段から感覚的に使用している当たり前の日本語表現が持つ独特さや豊かさを、読者に気づかせる役割を果たしているのである。

そこで、次章では、特徴的な日本語表現であり、多和田葉子の特徴が最もよく表れている「言葉遊び」について、分析し、考察していく。

第三章「献灯使」における「言語実験」

多和田葉子は、作品内に、いくつもの「言葉遊び」を散りばめているが、それらは、単純なものから複雑なものまで、種々雑多に混ざっていて、個々に分析が必要である。そこで、本章では、まず、単純なものの分析からはじめていく。

無名と義郎が、歯医者を受診した場面の会話に、単純な「言葉遊び」が組み込まれている。義郎が、「欠けてしまったんです」と歯科医に伝えた後に、「書けてしまったんです」という同音異義語に、発音が寄ってしまったことに気づき、「乳歯ですけど」と、後から主語を倒置法で補完する場面がある。これに続けて、無名は、以下のように反応する。

こういうのを倒置法と言うんだ、と思った。一方、無名はまだ漢字がほとんど書けなくせに語彙だけは豊富なので、「落ちてしまったんです、入試ですけど」という意味を漢字抜きで思い浮かべて一人にやにやしていた。(二三頁)

この場面では、無名が、義郎が発した「乳歯」と「落ちる」から、同音異義語である「入試」と「落ちる」を連想して、にやにやしている。しかし、それだけではない。無名は、さらに、義郎と同じ文章表現法、倒置法を使用している。このことから多和田葉子は、意図的に、同音異義表現を組み合わせた文章を物語に織り交ぜることで、日本語の多様性や面白さを読者である我々に提示しているといえる。倒置法を使用したのも、同音異義語である「入試」と「乳歯」を際立たせるためであろう。しかし、多和田葉子の「言葉遊び」は、このような単純な表現技法の組み合わせに留まらない。多和田は、新しい日本語を作り出すことさえ、やってのけるのだ。

そのように用もないのに走ることを昔の人は「ジョギング」と呼んでいたが、外来語が消えていく中でいつからか「駆け落ち」と呼ばれるようになってきた。「駆ければ血圧が落ちる」という意味で始めは冗談で使われていた流行言葉がやがて定着したのだ。(九頁)

外来語が禁止になった世界で、どのように今まで使っていたカタカナ表現を補完するか。ここでは、カタカナ表現の代わりに、従来の日本語表現を新しい形へと変化させて使用することで、その問題が解決されている。「駆け落ち」という単語が、結婚を許されない相愛の男女が密かに他の土地へ逃げるこの意味ではなく、駆ければ血圧が落ちるという新しい意味で、ジョギングの代わりの言葉として使われている。ここで、多和田葉子は、元々、単語と紐づけられていた意味を、その単語から引き剥がし、別の意味を与えることで、新しい単語へとつくりかえている。つまり、言葉を解体し、再び構築しているのだ。これは、もはや、「言葉遊び」の域を超えて、「言語実験」といえるだろう。多和田は、倒置法や同音異義表現を用いた、単純な「言葉遊び」から、言葉を解体し、再構築するという、複雑な「言葉遊び」——「言語実験」ともいえることを、物語内でおこなっているのだ。

さらに、多和田葉子は、日本語のみならず、英語においても、意味の解体と再構築をおこなう。

天狗社は岩手県に本社があり、靴の中に「岩手まで」と毛筆で書いてある。この「まで」は、英語を習わなくなった世代が「made in Japan」の「made」を自分なりに解釈した結果でできた表現だった。(一一頁)

この場面では、昔、靴の中に印刷されていた製造地を示す「made in」という言葉が、日本語の「まで」と解釈され、その表現が定着したことが語られている。ここでは、英語を日本語に変換しているが、それだけではない。「くる（made）」という英語の動詞を、「まで」という日本語の副助詞として変換している。つまり、言語のみならず、品詞すらも転換させているのである。

これらの「言語実験」のような表現について、市原礼子が、「ひとつの漢字が解体されて、別々の漢字に分かれて登場し、同音異義の単語がどんどん出てきて、言語が主役になっているような文章もある」と指摘しているように、ここまで分析してきた「言語実験」のような表現は、明らかに特徴的な言葉である。また、「言語」について、多和田葉子は、菅啓次郎、野崎歓との鼎談の中で、「言語には、成り立とうとしているけれども、同時に壊れようとしている力が含まれていて、だからこそ生きている」や「一つの単語がはつきり何かをさしめそうとしているんだけれども、同時に、さしめしているイメージやそこにまわりついた思い込みとか因襲みたいなものを揺すぶって、壊してしまう力も言葉にはある」と語っているように、「献灯使」に描かれた「言語実験」は、言語の成り立とうとする力だけでなく、壊れようとする力も、最大限に引き出したものだろう。そして、既存の表現を解体し、新たな表現として再構築する

という「言語実験」を作中でおこない、その結果、生まれた特徴的な日本語表現を創り出していることから、やはり、市原が指摘したように、「言語」は「献灯使」において、義郎と無名という物語の主人公とは別の、もう一つの主役といえるだろう。しかし、多和田葉子が、作中でおこなっている「言語実験」は、これだけではない。多和田は、日本語表現のアップデートをおこないつつ、現代社会を暗に批判するようなユーモアを含んだ皮肉な「言葉遊び」も、物語内に織り交ぜている。

義郎は新宿駅から成田空港まで無人エクスプレスに乗っている自分を想像してみる。実際は、空港行きの電車などもう存在しないし、カタカナ独特の高価な速度を売りつけるエクスプレスに乗る人もエクスプレスを飲む人も見あたらない。(三四頁)

この場面では、義郎が空港に行く自分の姿を想像しているが、肝心なのはそこではない。「カタカナ独特の高価な速度を売りつけるエクスプレス」と、日本語ではなく、カタカナ英語を利用し、購買意欲を高めるプロダクトが暗に揶揄されているところだ。また、以下の場面では、ユーモアたっぷりに、現代社会に潜む小さな社会問題がいくつも揶揄されている。

新しい休日 は、歴代天皇の誕生日ではなく、名前も日も国

民投票で決められた正真正銘、民主主義的な休日ばかりだった。(中略)「体育の日」はからだが思うように育たない子供が悲しいように「からだの日」になり、「勤労感謝の日」は働きたくても働けない若い人たちを傷つけたために、「生きているだけでいいよの日」になった。(中略)「インターネットがなくなった日を祝う「御婦裸淫の日」(中略)」なども誕生した。(五四、五五頁)

この場面では、祝日の名前が新しいものに変ったことと、新たに祝日となった日について語られている。「民主主義的な休日」とあるように、「体育の日」が「からだの日」、「勤労感謝の日」が「生きているだけでいいよの日」に変わったように、どの休日も、民意に寄った祝日であり、コンプライアンスへの配慮が十分すぎるほどにされていることも分かる。これらは、行き過ぎた民主主義やコンプライアンスに縛られた現代社会を暗に批判したもののだろう。また、「インターネットがなくなった日を祝う」オフラインの日の当て字が、「御婦裸淫」というセクシユアリティに関連する漢字で構成されていることから、御婦裸淫の日は、インターネットに蔓延するポルノコンテンツを揶揄したものと捉えられる。これらの祝日名称の変更については、元の表現から、読者が理解できるような別の表現へと変化していることから、既存の日本語表現のアップデートを試した「言語実験」といってよいだろう。

これらの場面から分かるように、多和田葉子は、「言葉遊び」という技法を用いて、日本語表現のアップデートをおこないつつも、ユーモアたっぷりに、現代社会や政治を暗に揶揄している。これは、「言語」の「成り立とうとする力」と「壊れようとする力」の両方を引き出そうと試みている多和田だからこそ出来る非常に高度な技術である。

以上の場面の分析から、「献灯使」には、物語の中に、特徴的な日本語表現が織り交ぜられていて、物語が進むと同時に、多和田葉子による「言語実験」が複数にわたって、おこなわれていることが分かる。また、これほどまでに、「言葉遊び」にこだわっていることから、やはり、「日本語」という言語そのものが、この「献灯使」のもう一つの主役であるといえる。

では、これほどまでに「言語」にこだわっている多和田葉子の言語感覚とは、一体どのようなものなのだろうか。そして、多和田は、なぜ、このような「言語実験」を作品内で繰り返すのだろうか。

第四章 多和田葉子と「言語」

まず、多和田葉子の言語に対する興味関心は、「ある言語作業に集中的に取り組んだ期間」⁽¹⁾だけつけた日記『言葉と歩く日記』を出版するほどに高い。つぎに、多和田の言語感覚については、多和田本人の発言から紐解いていきたいと思う。多和田は、自

身の言語感覚について、エッセイや評論の中で、以下のように語っている。

言葉は穴だらけだ。(中略)もちろん、いつもその言葉だけ使っていれば、そんなことは気にならない。穴は、外部に立った時にしか見えない。⁽¹²⁾

ここで、多和田葉子は、「言葉は穴だらけ」で、その「穴は、外部に立った時にしか見えない」と述べている。これは、日本語に限らず、ある言語の穴を見るためには、その言語の外に出る必要があるということである。多和田自身、ドイツに移住し、日本語という母語の外に出ている。さらに、多和田は、日本語ではなく、ドイツ語が「ものを考える言葉」になっていると述べている。これは、つまり、多和田が、日本語について考える際には、ドイツ語を通して考えているということでもある。さらに、「言語」の「言葉遊び」的な要素についても、同様で、多和田は、以下のように述べている。

合成語や慣用句などは、中に面白いイメージが隠されていても、普段わたしたちは、それを気にとめないで使っている。(中略)外国語を学んでいる時のほうが、母語でしゃべっている時よりも、そういうことに気がつきやすい。⁽¹³⁾

ここでも、多和田葉子は、「外国語を学んでいる時」のほうが、母語のユニークな表現の面白さに気づきやすいと述べている。ならば、「献灯使」に描かれている「言葉遊び」は、日本から離れたことで、見えてきた日本語表現の潜在的な面白さを引き出したものといえるだろう。

そして、ドイツ語を視座として、日本語を見ている、考えているというところが、他の日本人作家と多和田葉子の言語感覚の違いであり、多和田独自の言語感覚の根幹でもある。

さらに、多和田葉子は、作家として「言語」を使うことについて、以下のように語っている。

その言語の中に潜在しながらまだ誰も見たことのない姿を引き出して見せることの方が重要だろう。そのことによって言語表現の可能性と不可能性という問題性に迫るためには、母語の外部に出ることが一つの有力な戦略になる^[13]。

また、多和田葉子は「言語表現の可能性と不可能性という問題性に迫るため」の方法として、「母語の外部に出る」以外にも、以下のような選択肢の提示している。

母語の外に出なくても、母語そのものの中に複数言語を作り出すことで、「外」とか「中」ということが言えなくなることもある^[15]。

ここで、多和田葉子は、小説を書く際に、重要視していることに、「その言語の中に潜在しながらまだ誰も見たことのない姿を引き出して見せること」をあげているが、まさに、「献灯使」に描かれた「言語実験」は、この思念を形にしたものだろう。

そして、多和田葉子は、「献灯使」という物語を紡ぐにあたって、母語の外に出るというアプローチではなく、「言葉遊び」というツールを使つて、「母語そのものの中に複数言語を作り出す」アプローチを選んだ。ここで、多和田がいう「複数言語」とは、我々が、使っている日本語（作品内では、前時代とされている）と、外国語が禁止になった後に、創り出された日本語という二つの日本語が共存しているということだろう。

また、多和田葉子が、「言葉遊び」を使つて、日本語表現の「まだ誰も見たことのない姿」を引き出していることから、「言語実験」の最大の目的は、「言語表現の可能性と不可能性」に迫ることであるといえる。この「言語表現の可能性と不可能性」とは、日本語の中に、組み込まれつつあるカタカナ英語を、日本語表現から排し、漢字と平仮名だけで、どれほどの日本語表現が代替可能であるのか、その限界を探るということだろう。その証拠に、多和田は、ジョギングやジャーマンブレッドを完全な日本語表現に置き換える。あるいは、オフラインのように置き換えが不可能なものは、漢字を当て字にするなど、様々な方法で、カタカナ英語表現を、漢字、平仮名のみで構成された日本語表現に作り替えている。

では、なぜ、多和田葉子は、その「言語実験」の舞台に「献灯使」を選んだのか。それは、鎖国状態であり、全てが崩壊した後の世界と、「言葉遊び」という表現が深く結びついているからである。これは、一体、どういうことか。

これについては、多和田自身が、「言葉遊びは閑人の時間潰しだと思っている人がいるようだが、言葉遊びこそ、追い詰められた者、迫害された者が積極的に掴む表現の可能性なのだ⁽¹⁶⁾」と述べている。つまり、「献灯使」の世界のように、鎖国状態で、これまで使っていた言葉でさえ使用できない世界では、言葉を新たに創造するしかない。この意味で、「言葉遊び」は、多和田がいうように、無名や義郎に残された「表現の可能性」なのである。そして、外国語が禁止のディストピア世界と「言葉遊び」の親和性が高いという、この状況は、多和田が「言語実験」をおこなう目的である日本語表現の可能性と不可能性を確かめるために、非常に適している。だからこそ、多和田は、「献灯使」を「言語実験」の舞台に選んだのだろう。

そして、この「言語実験」は、作品内外に大きな影響をもたらしている。まず、「言葉遊び」に、「越境」と関連しているものが多いことや、「献灯使」の世界観を反映したものであることから、作品内においては、作品の世界観や「越境」要素を引き立てることに役立っているといえる。また、野崎歓が、「献灯使」の語りについて、「ユートピアの正反対、まさにディストピア文学でしかありえないはずの条件がそろっているのに、

「呪い」を軽やかに振り払うしなやかな語りが実現されている」と述べているように、全てが崩壊した世界というその設定とは裏腹に、ここまで読解をしてきた「言葉遊び」は、どれもリズムミカルで、軽快な雰囲気すら感じる。しかし、これは、言葉が軽薄という意味ではない。「献灯使」という物語の中で、「言葉遊び」は、物語の世界観などのダークな側面を照らし、暗さを和らげる光のような役割も担っているのだ。

次に、「言語実験」が物語外に与える影響に関連して、リービ英雄が、多和田葉子の描く言葉について、「コンプレックスと民族主義とスノビズムを解体した結果、見えてくるのは、「美しい日本語」ではなく、「生きている日本語」⁽¹⁸⁾」だと指摘しているように、多和田は、カタカナ英語などの表現を排し、既存の日本語を解体し再構築するという「言語実験」をおこない、その結果、新たに誕生した日本語表現、つまり生まれたての日本語表現を書いている。

さらに、その「生きている日本語」で書かれた作品を読者が読むことを通して、日本語という言語そのものについて考える機会になるという点で、「言語実験」は、作品外にも影響を与えている。

以上のように、多和田葉子は、「献灯使」で「言語実験」をおこなうことにより、日本語に潜在している、まだ誰も見たことがない姿を引き出し、「言語表現の可能性と不可能性」という問題性」に迫っている。そして、その作用は、作品内外に及んで

いる。作品内では、物語の世界観を引き立たせるだけでなく、文章を軽やかにする役割を、作品外では、読者である我々に、日本語表現の魅力や可能性を考えさせるきっかけを与える役割を果たしている。

では、これまで見てきた多和田葉子が描く言葉はどのような可能性を持っているのだろうか。

例えば、「献灯使」については、野崎歓が、以下のように述べている。

カタカナ表記の消滅という事態と引きかえに、日本語が新たな表現と身体を見出すというプロセスが認められる。

〔中略〕あるいは、意味の枠をはみ出してやろうという不埒な気配を、言葉はつねに秘めているともいえる。そこに文学創造にとっての根拠もある¹⁹⁾。

ここで、野崎が、多和田葉子の描く言葉に関して、「意味の枠をはみ出してやろうという不埒な気配」を秘めていて、そこに文学創造にとつての根拠もあると指摘したように、多和田が描く言葉は、文学に、新たな形式を生み出す可能性がある。これは、多和田が、「言葉遊び」をはじめとして「言語実験」という、これまででない画期的な試みを物語内に埋め込んでいくからだろう。多和田は、カタカナ表記の消滅という代償と引きかえに、「言語実験」の中で、新たな言語創造を試みているのだ。

つまり、多和田葉子の描く言葉は、「越境文学」「ディストピア文学」「震災文学」「日本語文学」という既存のジャンルはもちろんのこと、言葉を解体して再構築するという「言語実験」をおこなうことで、日本語の持つ潜在的な魅力を引き出し、新しい日本語を生み出すという「言語」の新たな境地を切り開く「言語創造」をも射程に収めている。

注(1) 米最高権威の文学賞芥川賞作家の多和田葉子さんが受賞

(日本放送協会) (二〇一八年十一月一日) のオリジナルアーカイブ版 二〇二三年二月二〇日閲覧。米最高権威の文学賞芥川賞作家の多和田葉子さんが受賞 NHK ニュース (archiveorg)

(2) 范淑文「作家に語られた震災——多和田葉子を中心に——」

『比較日本学教育研究部門研究年報』二〇一九年三月 一〇八—一四頁。

(3) 増本浩子「希望に満ちたディストピア——多和田葉子の震災文学」(『DA』二〇一九年六月) 五三—六七頁。

(4) 木村朗子「放射能災害の想像力——多和田葉子「献灯使」のかたること」(二〇一八年度フェリス学院大学内共同研究——ポピュリズムとアート) 二〇一九年三月 一〇三—一〇八頁。

(5) 安西晋二「多和田葉子「献灯使」に描かれた〈老い〉——身体と認識との差異」(『國學院雑誌』二〇一九年七月) 二一—三四頁。

- (6) 岩川ありさ「変わり身せよ、無名のもの——多和田葉子『献灯使』論」(『すばる』二〇一八年四月) 一六四—一七三頁。
- (7) 市原礼子「多和田葉子ディストピア小説——『献灯使』」(『群系』二〇二二年七月) 九六—一〇一頁。
- (8) 本文引用は、全て多和田葉子『献灯使』(講談社文庫、二〇一七)による。
- (9) 注(7)と同じ。九六頁。
- (10) 多和田葉子・管啓次郎・野崎歓「饗宴 言葉を楽しむ悪魔——放浪・翻訳・文字」(『ユリイカ 総特集 多和田葉子』二〇〇四年二月臨時増刊号) 一三三頁。
- (11) 多和田葉子『言葉と歩く日記』(岩波新書、二〇二三年) 二二二頁。
- (12) 多和田葉子『カタコトのうわごと』(青土社、二〇二三年) 五三頁。
- (13) 多和田葉子『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』(岩波書店、二〇二二年) 一七六頁。
- (14) 注(13)と同じ。一〇頁。
- (15) 注(13)と同じ。四三頁。
- (16) 注(13)と同じ。八一頁。
- (17) 野崎歓「ディストピアを悦ばしく生きる」(『群像』二〇一四年二月) 三〇六—三〇七頁。
- (18) リービ英雄「『エクソフォニー』の時代」(多和田葉子

- 『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』岩波書店、二〇二二年) 二一六頁。
- (19) 注(17)と同じ。三〇六頁。